

詩編 24 : 1～10

ルカによる福音書 21・20～29

「頭を上げよ」

<終わり>

ルカによる福音書では 21 章に入って、イエスさまがエルサレム神殿の崩壊を予告され、さらに戦争や暴動、地震や飢饉や疫病、恐ろしい現象が色々と起こるということを語られました。さらには、イエスさまを信じる者が迫害に遭うこと。親しい者に裏切られたり、殺されたりすることもある、と語られました。

厳しいお言葉です。しかし、これらはわたしたちが実際、この世で、現実で、直面する出来事です。これらの目に見える崩壊、破滅、悲惨さ。わたしたちはこれによって世界の終わり、そして自分の終わりを予感します。滅びへ向かう恐怖を思います。

だからわたしたちは、焦ったり、不安になったりします。そして、偽りの安心に飛びついたり、惑わされたり、おびえたりしてしまうのです。

今もまさに、わたしたちはこのような現実を目の当たりにしています。それは、世界の破滅を予感させるような、また自分の死をも考えさせるような、不安に満ちた、絶望の淵を覗くような、そんな出来事が起こっています。

しかし、イエスさまは言われたのです。「惑わされないように注意しなさい。」「おびえてはならない。」「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」

なぜなら、これらの、この世の、目に見えるものの崩壊や、苦しみや、滅亡は、決して本当のこの世の終わり、また、本当のわたしたちの終わりではないからです。

イエスさまは前回読まれた 9 節でこう言われました。「戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

わたしたちのどうしようもない罪の現実の中で、このようなことは起こります。被造物であり、決して永遠ではないこの世界に、わたしたちに、こういうことは起こるのです。

しかし、わたしたちの罪によって、破壊によって、自然現象によって、この世の終わりが来るのではない。わたしたちが終わるのではない。イエスさまはそう言われたのです。

<イエスさまの再臨によって>

この世のまことの終わりは、イエスさまが再び来られることによってもたらされます。終わりの日は、神さまのご支配のもとで起こります。神さまが時をお決めになり、神さまが望まれる方法で、神さまによってもたらされます。

そして終わりの日は、すべてが消滅したり、滅びたり、破局を迎える日ではなくて、神さまのご支配が完成する日。わたしたちの救いが完成する日。万物のすべてが、新しくされる時なのです。

そのことが、今日の 27～28 節に語られています。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」

「あなたがたの解放の時」。この「解放」という言葉は、他の聖書箇所では「贖い」と訳されています。つまり、罪を贖われて、解放されること。身代金が、あるいは負債が支払われて、自由にされることです。

イエスさまを信じる者は、イエスさまの十字架と復活によって、この救いの御業がすでに成し遂げられ、罪から解放されたことを知っています。すでにその恵みに与っていることを信じています。しかしそれはまだ、すべての人の目に明らかになっていることではありません。神さまのご支配は、まだすべての人が受け入れているわけではありません。

そういう意味で、神の国はイエスさまにおいて実現したけれども、まだ完成していない。まだ、全ての人の目に明らかになっていない。今はそのような時なのです。

しかし、天に上げられたイエスさまが再び来られる日。この世の終わりの日。その時には、ルカによる福音書 17 章で、「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れる」と言われていました。

人の子、つまりイエスさまが、再び現れる時には、稲妻がすべての人の上で光り、轟き、認識せざるを得ないように、信じる者も信じない者も、すべての者の目に、一瞬にして神のご支配が明らかになる。すべての者にはっきりとイエスさまの存在が知れ渡る。目をふさいでも、耳をふさいでも、どうしようもなく直面させられる。そのような仕方で、イエスさまは再び来る、と言われたのです。

それは、わたしたちにとっては、罪と死から解放されたことが、神のご支配が、はっきりと明らかにされる日。見えないものを信じていたわたしたちが、はっきりとこの目で救いの恵みを見る日となります。すべてが明らかになる。この目でイエスさまを見る。

イエスさまを信じる者にとって、このまことの終わりの日は、希望の日にはなりません。だから、目の前の、見えるものの滅びや、破滅や、苦しみに、うなだれて、俯いて、絶望することはなく、と言われているのです。

むしろ、イエスさまを信じる者たちは、この解放の時を待ち望みつつ、まことの終わりの日を仰ぎ見て、「身を起こして顔を上げなさい」。解放の日、恵みの日、救いの完成の日に目を向けて歩みなさい、と言われているのです。

<エルサレムの崩壊>

さて、今日のところでは、20～24 節のところ、目の前の、この世の見えるものの崩壊が迫る時のこと。そして 25～28 節に、まことの世の終わりの日のことが語られています。

21 章 5～6 節では、人々とイエスさまのこのようなやりとりがありました。

「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。『あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。』」

これは、エルサレム神殿の崩壊の予告です。そこからイエスさまは、目の前の崩壊や滅亡が世の終わりではないこと、また、まことの世の終わりがその先にあることを語られました。そして 20 節以下でまた、エルサレムの神殿崩壊の話に戻ってきたのです。

エルサレムは、神さまを礼拝する豪華絢爛な第二神殿がそびえ立ち、ユダヤ人たちの心の拠り所。生活においても、宗教においても、精神においても、すべての中心地となっていた町です。つまりエルサレムは、神の町、神の都なのです。

しかし、これが軍隊に囲まれたら、イエスさまはエルサレムから逃げなさい、と言われました。今のわたしたちからすると、戦地から逃れようとするのは当たり前ではないか、と思うかも知れません。しかし当時、エルサレムは城壁に囲まれており、敵軍が攻めてきたら、エルサレムの町の外に住む人々も、この城壁のある町の中へ逃げ込んで、エルサレムの都そのものを砦として戦うのが常だったのです。

それに、ここは神の都、神の神殿がある場所です。そんなエルサレムが滅びるはずがない。ここにいれば絶対に安心、絶対に安全。それが当時の人々の考えでした。

だから、イエスさまが仰ることは、当時の常識とは、まるで正反対のことだったのです。

やがて紀元 70 年、本当にエルサレムがローマ軍によって包囲されてしまいました。

紀元 70 年と言えば、イエスさまが十字架に架かって死に、復活され、天に上げられてから 40 年ほど経ったころでしょうか。弟子たちが各地で福音を宣べ伝え、小さなキリスト教会の群れがいくつも生まれ、歩み始めていたところ。エルサレムにも教会があり、各地の教会の中心的な役割を果たしていたことが、使徒言行録に記されています。

さて、このエルサレムが包囲された時、ユダヤ人たちは当然エルサレムの町の中へ逃げ込み、また神殿へ駆け込みました。神殿にいれば安心だと言われたからです。そして、そのままエルサレムは陥落し、神殿は焼かれ、これは誇張があるかも知れませんが、100 万人近い人々が亡くなったと伝えられています。

一方で、エルサレムにいたキリスト者たちは、このイエスさまの御言葉が伝えられていたために、多くがエルサレムの町を出て、山へ逃れたと言います。しかし彼らも、イエスさまを信じる信仰を持ったとはいえ、ユダヤ人の一人でもあります。エルサレムから逃げる。神

殿を捨てる。心の拠り所から離れる。これは、とても困難な決断だったに違いありません。しかし、イエスさまは、そこから離れて歩む、新しい道を示されたのです。

目に見えるものは滅びる。この世のものは失われる。もちろん、これまで神殿は、神の民が生贄をささげ、神さまを礼拝する場所として、信仰の歩みを支える大きな役割を果たしてきました。

しかし、それは絶対的なものではありません。神殿に救いがあるわけではありません。

ですから、神殿に依存するがゆえに、神の民が、神の御心を忘れ、背き、恵みを拒むなら、それは神の怒りにふれ、神殿といえども、神の都エルサレムといえども、滅ぼされるのです。

しかし、この神殿が失われても、神さまの恵みが失われたり、救いがなくなったりするものではありません。救いの恵みの根拠は、神殿ではありません。都ではありません。

救いは、神さまから来ます。そして、神さまが遣わして下さった神の御子イエスさまこそが、救い主として、十字架の苦しみと死によって、救いの御業を成し遂げて下さったのです。

神殿では、これまで罪の赦しのための生贄が献げられてきました。しかし、イエスさまがご自分の命を、わたしたちの罪のために、一度きりの、完全な生贄として献げて下さった今や、わたしたちはもはや、動物を献げる必要はなくなったのです。

また、これまでは割礼を受けたユダヤ人が、神の民とされてきました。しかし、イエスさまが救いの御業を成し遂げて下さった今や、イエスさまを信じる信仰によって、すべての者が神の民に加わることが出来るようになったのです。

24 節の後半に「異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」とありますが、まさに異邦人の時代が来る。異邦人に神の救いの恵みが宣べ伝えられ、異邦人が新しい神の民として招かれ、集められ、加えられていく時代となったのです。

イエスさまは、ご自分の十字架と復活による救いの御業によって、もはや神殿に頼らない、新しい礼拝を備えて下さり、また血筋や血統に頼らない、信仰による新しい神の民を興して下さったのです。

救いは、神さまから来ます。神さまに遣わされた、イエスさまから来ます。救いの根拠は、この神の御子にこそあります。

イエスさまは、ご自分が十字架に向かわれる中で、これからすべての御業を成し遂げようとされる中で、「あなたがたは、もはやこれから、神殿に依り頼まなくてよい。見えるものに頼らなくてよい。神の都エルサレムに命を懸け、神殿と共に心中しなくてもよい。神殿から、エルサレムから離れても良い。このわたしにこそ、命を預けなさい。このわたしのもとに留まって、命を得なさい。わたしが十字架と復活によって、新しく切り拓いた救いの道へ、歩み出しなさい。」そう言って下さったのです。

「逃げる」とは、目の前の現実から離れることです。自分を捕らえていたものから、遠ざ

かることです。しかしそれは、何もしないことや、諦めることや、退くことではありません。むしろ、まったく新しい生き方へと踏み出すことなのです。神の都や神殿という、自分なりの心の拠り所としていたものを手放して。そこから自由になって。イエスさまによって示された、本当に依り頼むべきところに、進み出ていく、ということなのです。

その時、わたしたちは、この世の罪も、死も、現実も、すべてを覆って下さる、神さまのまことのご支配が、目には見えないけれども、確かにあるということ。そして、イエスさまがそのご支配を完成させて下さる、まことの世の終わりがあることを知らされるのです。

たとえ、わたしたちが崩壊を目の前にしても、破滅を見つめることになっても、たとえ迫害を受けても、やがて自分の命の終わりを迎えることになっても。この世で起こる目の前のことが、わたしたちを支配しているのではないし、すべてを終わらせるものではないのです。

だから、惑わされなくてもよい。おびえなくてもよいのです。イエスさまの下に留まることによって、まことの命を得る。イエスさまの下にこそ、まことの命がある。

このことを信じて、望みを持って、歩んでいく道が、備えられているのです。

<解放の時>

この、終わりの日の望みがあるならば、わたしたちは「身を起こして頭を上げ」て、歩んでいくことができます。

この希望がないならば、わたしたちは何によって身を起こすことができるのでしょうか。何によって頭を上げることができるのでしょうか。悲惨の中で、自分のどうしようもない罪の中で、弱さの中で、脆さの中で、死の前で、わたしたちを支え得るものは、この世には本当に、何もないのです。

しかし、わたしたちには、この苦しみや悲惨さの中から、罪と死の中から、解放して下さる方がおられます。救い主が、与えられているのです。

さて、イエスさまが再び来られる日。25節以下にはこうありました。

「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。」

人の子が来られる時に、人の子を見るのは、信じている者だけではありません。信じている者も、信じていない者も、すべての者が、これを見る。

その時、天体が揺り動かされると言います。その時、人が決して揺れると思っていなかったものが揺れ動き、絶対だと思っていたものが揺さぶられるのです。

永遠なる神さまの御前で、神さまのご支配と勝利の御前で、この世のあらゆるものは移ろい、消えゆくものであることを、一人一人が、その目で、はっきりと知らされるのです。

その時、神などいない、神などいないと言っていた者、自分自身の思想、哲学、理性や、世の力が絶対だと思っていた者は、それらが揺れ動き、崩れ去るのを見るでしょう。

神を求めなかった者が、神の目の前に立たされるのですから、それは恐ろしいことに違いありません。なすすべを知らず、不安に陥り、おびえ、恐ろしさのあまり気を失う。ここでまさに、自分で依り頼んでいた世の全てのものが、揺らぐのです。

これこそ、神さまの審きと言えるでしょう。

しかし、イエスさまを信じる者にとっては、それは待ち望むべき日です。救いの完成の日。すべてが新しくされる日。神さまのご支配の完成の日です。天におられ、聖霊によって地上の歩みを共にして下さっていた、わたしの救い主であるイエスさまが、今や目の前に立たれ、その語りかけられる御声を直接聞き、その御腕に迎え入れて下さる時なのです。

27節以下にはこうありました。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

雲とは、神の栄光を現わす言葉です。はじめにイエスさまが世に来られた時には、この栄光を打ち捨てられ、まったく低く、貧しく、小さくなって、わたしたちのもとの来て下さいました。それは、罪人で、悲惨で、貧しく、小さいわたしたちと、共にいて下さるためです。

しかし、すべての救いの御業を成し遂げられ、天に上げられ、再びわたしたちのもとに来られる時には。イエスさまは、神の力に包まれて、すべての勝利者として、すべての支配者として、わたしたちの贖い主として、栄光に満ちたお姿でおいで下さる。わたしたちを解放するために。死から起き上らせるために。朽ちるものから、朽ちないものへと新しくして下さるために。救いを完成して下さるために。神の大いなる力と栄光を帯びて、イエスさまは再び来て下さるのです。

<身を起こして頭を上げて>

そうであるならば、わたしたちにとって終わりの日は、おびえるどころか、喜んで躍り上がり、歓喜の叫び声を上げるような日です。待ち焦がれに待ち焦がれた主に、やっとこの目でお会い出来る日です。身を起こして、頭を上げて、立ち上がって、手を伸ばして、来て下さった方に駆け寄っていく程に、待ち詫びていた日です。

この喜びの日を待つ者であるならば。この再び来られる主に希望を置く者ならば。わたしたちは世のものを見つめて、慌てたり、揺り動かされたりしなくて良いのです。

イエスさまに捕らえられているわたしたちは、イエスさまの御許に留まることによって、目に見えるものを覆いつくす、見えない神の恵みのご支配があること。また、滅びの向こうに、世の終わりの先に、新しい天地と、まことの永遠の命があることを、信仰の目ではっきりと見つめることが出来るのです。

だから、今のこの時からでも、わたしたちは、身を起こして、頭を上げるのです。それが、イエスさまを信じる者の歩む姿だと言われているのです。

身を起こして頭を上げるとは、決して自分の力で堂々と、凛々しく、勇敢に歩む、ということではありません。

天におられるイエスさまを見つめ続けるゆえに。イエスさまがそのように希望を与え、天から恵みを注いで下さるがゆえに。わたしたちは喜んで、主を見上げることが出来るのです。喜んで、主を待ち望むことが出来るのです。

そして、そのように神のご支配をこそ見つめ、終わりの日を、希望を持って待つ時にこそ。わたしたちは、現実絶望することなく、諦めたり、自暴自棄になったりせず、困難や、苦難や、厳しい現実の中にあっても、主の支えによって、しっかりとそこに立つことが出来る。しっかりとそれらを見つめて、向き合っ、神さまの御心を、自分がなすべきことを、真剣に祈り求めていくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

悲惨さに、厳しさに、苦しみに、目を覆いたくなるような、わたしたちの現実です。わたしたちの罪はあまりに深く、またこの世のものはあまりに脆いものばかりです。

しかしあなたは、わたしたちを、そしてこの世界を、憐れみ、愛し、救って下さるお方です。だからこそ、イエスさまが遣わされ、十字架の死によってわたしたちを罪から贖って下さり、復活によって新しい命を与えて下さいました。そして、終わりの日には、再び来て下さり、天も地もすべてを新しくし、わたしたちの救いを完成させて下さることを約束して下さいました。そのことを信じます。罪の赦しと、永遠の命と、復活の約束を信じます。

どうか、神さまの御心がなりますように。一人でも多くの者が、イエスさまを信じ、まことの終わりの日、救いの完成を、希望をもって待ち望み、身を起こして、頭を上げて、神さまをほめ讃えつつ、この地上を歩いていく者とされますように。わたしたち一人一人が、神さまの御心に従って、神さまを愛し、隣人を愛する者となりますように。

そして、どうか、御国が来ますように。主が来られますように。

救い主イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン